

【NHK高松放送局長賞】

人権作文

三豊市立豊中中学校 二年 川又誉

私は、家庭の都合で小学校三年生から五年生までの三年間、アメリカのカリフォルニア州で住んでいました。私が住んでいた地域では世界中から多くの人が来て、様々な人種の人々が暮らしていました。アパートの住人も多国籍で、我が家の上の階にはインド人の家族が住んでいて、ほぼ毎日カレーの良い匂いがしていたのを覚えています。

色々な国の文化や言語が、狭いコミュニティで共存しているような状況でしたが、人々は穏やかで、お互いを尊重し、自国のアイデンティティを大切にしている印象でした。渡来前は「アメリカは恐ろしい国だ」という印象がありましたが、地域の人々は優しく、駐車場などで会えばいつもフレンドリーに笑いかけて挨拶をしてくれて、言葉が分からなくても表情や雰囲気で見え方は伝わるといふことを学びました。

アメリカに入国し、私は両親と共にすぐに現地の小学校に編入の手続きに行きました。その地域では英語が母国語ではない子どもたちを集めて英語学習者専用のクラスを用意してくれていたのです、私はそこで三年生・四年生の合同クラスに入りました。

そのクラスには私の他に日本人が数名と韓国人、中国人、台湾人、インド人、ロシア人、スペイン人、メキシコ人、イギリス人など多くの国の人が居ました。

基本的人権について、これまで日本にいる時は全く意識することもなく、何も考えていませんでしたが、私はアメリカの小学校に通うことで、様々な忘れられない体験をすることになりました。

クラスに編入した当時、日本人の女子は私以外に二人居ました。そ

の二人は四年生で、私より年上でした。最初は私に学校での生活や授業の聞き方、先生のこと、宿題のこと等、たくさん教えてくれていたが、ある日突然、何も話してくれなくなりました。二人は休み時間になると私を避けて、でも、私に聞こえるように悪口を言うようになりました。学校では基本的に英語しか喋ってはいけないルールでしたが、休み時間はみんなそれぞれ自分の国の言葉で会話をしていたので、二人が話す日本語は、私の耳によく聞こえてきて、悲しかったです。

私がかいけない事をしたのかな、何か嫌な気持ちにさせてしまったかな、そう考えても何も分からなかったです。転校も考えましたが、何も悪いことはしていないので、堂々とクラスで勉強を続けることに決めました。

後から考えると、この時、私はいじめに負けず、学ぶ権利を手放さないで本当に良かったと思います。

日本人と一緒に居なくなってから、私は英語力が伸びました。そして、新学期から現地の普通クラスに通うことになりました。現地の普通クラスでは色々な国から来た人たちがいました。私は韓国人とインド人の友人と仲良くなりました。しかし、ここでもいじめや差別がありました。

まず、肌の色、英語の上手さで分かります。白人女子でクラスのボスのような子がいて、消しゴムを奪ったり、足をわざと踏んできたりしました。いじめの内容は万国共通なのだとか感心しました。自分との違いを尊重し、お互いに共存すれば良いのに、私たちは身近にストレスのはけ口となる存在だったのかもしれない。

人をいじめるのに正当な理由はありません。ここでも私は戦う覚悟を決めました。事態は思いがけずその白人女子の家庭の都合により、彼女は遠くに行くことになり終結しました。

今度こそ、平和な日が・・・と思った矢先、次は新型コロナウイルスが世界中に影響を及ぼすようになりました。学校は閉鎖され、授業は全てオンラインで行われるようになりました。このウイルスが中国から来た見込みがあったことから、アジア人は街を歩くと危険と言われた時期がありました。白人はマスクが苦手で、マスク＝感染率の高い病気の人というイメージがあり、着用率も悪かったです。実際にマスクをして街を歩いていると、白人男性から、「コロナ！」と大きな声で叫ばれたことがあります、それはとても怖かったです。

アメリカでの生活はとても楽しいものでしたが、常に色々な差別が見え隠れしていました。恐らく私が体験したことは氷山の一角なのだと思います。人はそれぞれ違っていて当たり前、その違いを受け入れることが大切なのだと学びました。もし誰かが差別により悲しい気持ちになっていたら、私はすぐに行動したいと思います。